

2-1-1

Playful Pedagogy とは

Playful Pedagogyの目指すものは？

榊原洋一

Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授



お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、医学博士。1951年東京都生まれ。東京大学医学部を卒業後、同大学附属病院小児科に勤務。発達障害のある子どもの医療に携わりながら、発達のメカニズムを研究する。東京大学医学部講師を経て、現職。専門は、小児科学、小児神経学、発達神経学、国際医療協力、育児学。主な著書に『乳児保育の基本』（フレーベル館）、『発達障害と子どもの生きる力』（金剛出版）など。

◎ 子どもの遊びに 大人がいかにかわるか

私は二十数年の間、小児科医として大学病院に勤務し、子どもが遊びを通して多くのことを学ぶ姿を見てきた。学びと遊びは、子どもの年齢が上がるにつれて分化していくが、幼児期には密接に結びついていると考えている。

ただ、一口に遊びと言っても、その内容も仕方も多岐にわたる。例えば、子どもが大人から何の指導も受けず、ただ自由に遊ぶ場合があれば、大人の指導を受けて遊ぶ場合もある。どのような遊びでも、同じように学びに結びつくのだろうか。あるいは、遊び方によって、得られる学びも違ってくるのだろうか。

こうした疑問を抱くようになったのは、10年ほど前、現在の勤務している大学に赴

任し、幼児教育に携わるようになってからである。

私の勤務している大学には附属幼稚園があり、教え子の学生がそこで保育実習を行うため、私も付き添うことがある。初めて付き添ったときは、私も子どもと遊んだのだが、後で園長先生に注意された。「もっと子どもを主体的に遊ばせてほしい」と。

言われてみれば、私は「積み木をしよう」「ブランコに乗ろう」というように、私がしたい遊びをすることだけを考えて、子どもを誘っていた。子どもに自分のしたいことを押しつけてしまっていたと反省した。

それ以来、保育実習に付き添うたびに、幼稚園で先生方がどのように子どもとかわっているかを注意して見学するようになった。一見すると子どもがただ自由に遊んでいるだけのように感じるが、よく見るとそうではない。どの先生も遊んでいる子ど

もの様子をしっかりと見とり、子どもが興味を持てるように働きかけるなど、必要に応じた対応をしていることに気づいた。

これをきっかけに、私はいくつもの幼稚園や保育所を見学するようになったが、受ける印象は同じだった。どの幼稚園や保育所でも、子どもが遊びを楽しむだけでなく、保育者が目的を持ち、それを実現できるように遊びにかかわっていると感じる。つまり、子どもの主体的な遊びを学びに結びつけているということである。

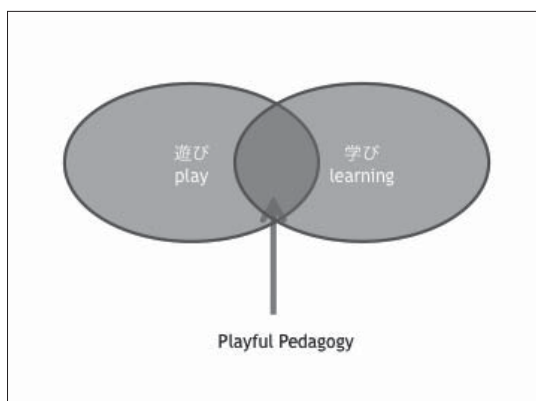
日本の幼稚園や保育所が以前から遊びを通した教育を大切にしていることは知識として知っていたが、幼児教育の現場を知る中で、身をもって感じるようになった。

● Playful Pedagogyの鍵となる Guided playの特徴

子どもの成長に対する遊びの影響についての研究は、近年、欧米の幼児教育学者や発達心理学者によって力が入られている。

欧米にも遊びを通した教育の仕方があり、Playful Pedagogy（楽しく遊びながらの教育）と呼ばれている。—— 図①参照

これを充実させるための重要な方法の1つとして注目されているのが、Guided play（ガイドされた遊び）である。これは、どの



図①

ような遊びなのだろうか。

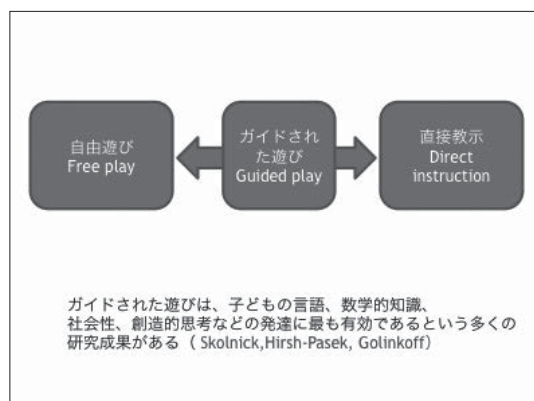
子どもの主体性によって、遊びを2つに分けてみよう。一方の極は、最も主体性が高い遊び、Free play（自由遊び）である。ここでは、大人は一切かかわらず、子どもが自由に遊ぶ。もう一方の極は、最も主体性が低い遊び、Direct instruction（直接教示）である。ここでは、大人の指導に子どもがただ従うことになる。そして、Free playとDirect instructionの中間に位置づけられる遊びが、Guided playである。—— 図②参照

アメリカの発達心理学者Hirsh-Pasekは、Guided playを成り立たせる要件として次の3つを挙げる。

- ①保育者が教育目的に沿った環境を用意すること
- ②保育者が子どもの自然な好奇心や探究心を刺激するように遊びの目的を設定すること
- ③保育者が子どもに何を学んでほしいかを考えて遊具などを選び、与えること

Hirsh-Pasekが、子どもに対する保育者のかかわり方を重視していることがわかるだろう。

このHirsh-Pasekによる定義に従って、Guided playとはどのような遊びなのか、その特徴を確認してみよう。まず「子どもの自然な好奇心や探究心」を重視する点で



図②

Direct instructionと異なる。また、「教育目標」の設定、それに沿った「遊ぶ環境」の整備、遊具の選定・提供などを大人が行う、換言すれば、すべてを子どもの自由にさせるわけではないという点でFree playとも異なる。つまり、Guided playとは子どもの主体性を尊重する一方、子どもの好奇心や探究心を刺激できるように大人がしっかり計画を立て、かかわる遊びといえるだろう。

— 図③参照

● Guided playはなぜ有効なのか

遊び、特にGuided playは、言葉や社会性の獲得など、子どもの発達にとって大きな役割を担うと、Hirsh-Pasekは述べている。では、なぜGuided playにそのような力があるのだろうか。これについて考えてみたい。

脳科学の研究では、子どもの成長は、子どもが抱く感情によって大きく左右される可能性があることを示唆している。楽しさや喜びなどのポジティブな感情を多く感じる環境にある子どもほど、発達が早く、学習内容を身につけやすい傾向が見られるのである。

そのため、Direct instructionでは、たとえ多くのことを学べるような遊びを保育者

が用意したとしても、子どもの感情が考慮されない以上、有効であるとはいえないだろう。

Free playでは、子どもは遊びに楽しさを感じるに違いない。その点では効果的であるが、保育者がかかわらないため、遊びが必ずしも学びに結びつくとは限らないだろう。

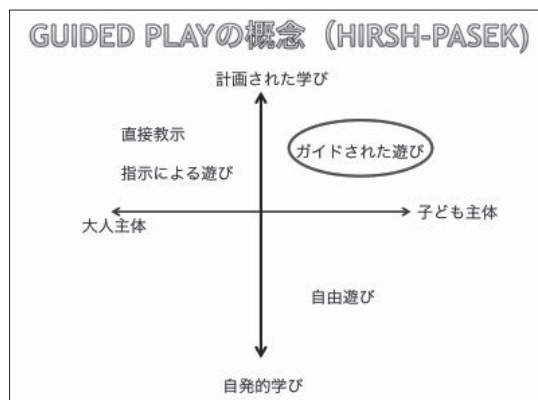
Guided playでは、保育者は子どもが学ぶ環境を整えつつ、あくまでも子どもが主体的に参加し、活用できるように促すことに務める。だからこそ、子どもは楽しさを十分に感じながら効果的な学びができるのではないだろうか。

Hirsh-Pasekも、「子どもが最も発達するのは、遊んでいるときである」と述べている。さらに、ただ遊ぶ、Free playを行うだけでなく、保育者によるガイドが加わる、Guided playとなることで、子どもの発達が促されることをさまざまな研究データによって裏づけている。— 表①参照

● Guided playは日本の伝統的な幼児教育法

子どもの主体的な遊びと保育者の適切なかかわり。Guided playに見られるこの要素は、日本の幼児教育が昔から充実させているものである。Guided playと日本の幼児教育法は同じ特徴を備えていることになるため、日本では伝統的にGuided playが行われていたと言っても過言ではない。一方、かつて私が学生の保育実習に付き添ったとき、幼稚園の園長先生にたしなめられた遊び方は、Direct instructionに当たると言うことができる。

恐らく、日本の保育者は日々子どもと向き合う中でGuided playの効果に気づき、そのノウハウを後輩へ伝授してきたに違いな



図③

表① Guided playが子どもの発達を促す研究データの例

学力における有効性	社会情緒的発達における有効性
<p>幼稚園で語彙を学習する30分間の活動を週2回、2か月間行った。活動内容は次の2つ。</p> <p>①30分間すべて指導者から教えられる</p> <p>②20分間指導者に教えられた後、学んだ言葉を使った Guided playを10分間行う</p> <p>①を行ったグループよりも②を行ったグループの方が、多くの語彙を身につけた。</p>	<p>ヘッド・スタート・プログラム(※)に参加している子どもを、①Direct instructionを行うグループと②Guided playを行うグループに分け、計画スキルを測る活動などを実施した。その結果、①のグループよりも②のグループの方が事後テストの成績が良かった。また、自由遊びの時間の過ごし方にも違いが見られ、②のグループの方がごっこ遊びを積極的に行うことが多く、何もしていない時間が少なかった。</p>

いずれもHan, Moore, Vukelich, Buell (2010) の研究より。

※アメリカ合衆国政府の支援のもとに行われるプログラムで、低所得層の子どもなどを対象とする。幼稚園入園の準備として、読み書きや言葉の力を高める活動などが行われる。

い。何世代にもわたる保育者の経験が積み上げられているからこそ、アジアの多くの国の幼稚園や保育所で英語や算数などを教えることが増える中、日本では遊びを通じた教育を連綿と続けられているのだと考えられる。

● 保育者には自信を持って子どもと向き合ってほしい

今後の課題について見てみよう。

先に紹介したアメリカの発達心理学者 Hirsh-Pasekは、Guided play を中心にした Playful Pedagogyの有効性を証明するために、さらに研究を続ける必要があると述べる。特に重要なポイントとして挙げられているのは、次の3つである。

① Guided playの定義を確立すること

Guided playとはどのような遊びかという概念を明確にすることである。前述したように、Hirsh-Pasek自身はその成立要件を「教育目標の設定と環境の整備」「子どもの好奇心・探究心を刺激する目標の設定」「学びに応じた遊具の選択」とするが、異なる見解を示す研究者もいる。何がGuided playかははっきりしなければ、その効果を検証できないし、普及させることもできないため、共通する定義を打ち出す必要があるという。

② Playful Pedagogyが子どもの発達・学習に及ぼす影響を明らかにすること

効果があることを示すデータはある程度得られているが、不十分であるという。1000人以上の子どもを対象に10年以上にわたって長期的に継続するような、大規模な研究が求められると述べている。

③ 遊びと学びとの因果関係を明らかにすること

Guided playがFree playやDirect instructionよりも子どもの発達に効果があるのはなぜか、そのメカニズムを解明することである。

このようにHirsh-Pasekは研究者にとってのポイントを挙げたが、では保育者にとってのポイントとは何だろうか。私は、これまで通り、しっかり子どもの様子を見とることだと考えている。日々、子どもと接する中で、子どもがどのような遊びに喜んで参加し、多くの学びを得ているかを把握して行ってこそ、幼児教育が豊かになるに違いない。

Guided playの長所、すなわち日本の幼児教育の長所は、近年の欧米での研究によって科学的に立証されつつある。日本の保育者には、自信を持って従来の教育法を実践していただきたい。